



2025 年 11 月 26 日

報道担当者各位

交通遺児育英会は、当会全奨学生に対して2回目の「ヤングケアラー調査」を実施。
調査結果を踏まえ、ヤングケアラー対策検討プロジェクトを設置。

■実施概要

調査目的: 公益財団法人 交通遺児育英会(石橋健一会長)は、当会の全奨学生を対象に「ヤングケアラーの可能性」等の生活実態をより正確に把握し、今後の支援策検討に活かすために、昨年に引き続き2回目の調査を実施。

調査対象: 当会の奨学生(743 名の内 467 名が回答、回答率 62.9%)

調査方法: Web 調査、記入式調査併用

調査期間: 2025 年 6 月 27 日から 7 月 25 日

※本件調査実施、結果分析にあたり、外部専門家の監修をいただいております。なお、調査実施にあたり、事前に保護者に対して今回調査の趣旨等についてご理解をいただくためのお手紙をお送りしております。

■調査結果概要

・ヤングケアラーとして家族の世話をしている(含む過去にしていた)方は、奨学生全体で 12.4%、うち高校生では全体の12.0%、大学・短大生以上で全体の12.8%と、全国調査(下記参考)と比較して当会奨学生のヤングケアラーの比率が高いことがわかります。主なお世話の対象者は父親か母親が多く、具体的なお世話の内容は「家事」(44.8%)、「外出の付き添い」(34.5%)、次いで「見守り」(31.0%)でした。

【参考】令和2年全国調査(三菱 UFJ R&C): 家族の世話をしている全日制高校生 4.1%。(主な世話の対象者は「きょうだい」44.3%)。令和3年全国調査(日本総合研究所): 家族の世話をしている大学3年生 6.2%。

・お世話をしている高校生の 50.0%、大学・短大生以上では 42.1%が「ほぼ毎日世話」をしています。1日あたり3時間以上お世話に費やしている高校生が 25.0%、大学・短大生以上では 15.8%いることも明らかになりました。

・お世話の開始時期は、「7 歳～12 歳(小学生)から」が 43.1%と多く、「6 歳以下」との回答も 5.2%ありました。お世話にしている期間については、「5～9 年」が 43.1%で最も多く、「10 年以上」も 15.5%おり、お世話が長期間に渡っている人が多いことが伺えます。

・ヤングケアラーの健康状態については、「精神的にきつい」との回答が高校生で 10.0%、大学・短大生以上で 23.7%、「時間的に余裕がない」との回答が高校生で 10.0%、大学・短大生以上で 18.4%ありました。



・相談の経験に関しては、高校生の50.0%、大学・短大生以上では63.2%が「相談したことがない」と回答しました。相談しない主な理由としては、「誰かに相談するほどの悩みではない」(高校生 70.0%、大学・短大生以上 66.7%)、「家族外の人に相談するような悩みではない」(高校生 20.0%、大学・短大生以上 20.8%)、「家族のこのため話しにくい」(高校生 20.0%、大学・短大生以上 4.2%)、「家族の状況をわかってもらえないと思うから」(高校生 20.0%、大学・短大生以上 4.2%)という回答でした。

・支援を求めていることとしては、高校生では「修学への特別支援金」(25.0%)、「家庭へのさらなる経済的支援」(20.0%)、「自由に使える時間が欲しい」(20.0%)、大学・短大生以上では「家庭へのさらなる経済的支援」(26.3%)、「進路や就職など将来の相談にのってほしい」(13.2%)が主な要望でした。

・お世話をしている奨学生のうち、自分がヤングケアラーに「あてはまる(含む過去)」との回答が 36.2%で、「あてはまらない」との回答が 27.6%でした。お世話をしながらもヤングケアラーであるという自覚をしていない方が一定数いることが伺えます。

・全奨学生のヤングケアラーの認知については「聞いたことがあり、内容も知っているが 61.9%(前回調査 60.1%)」、「聞いたことはあるが具体的な内容はよく知らない」が 19.1%(前回調査 17.2%)となっており、前回調査時より認知率が若干上がっていることがわかります。

この調査結果については、当会ヤングケアラーの実態を深く理解する一助にするとともに(今後も継続的に実施予定)当会の今後の支援プログラムの策定に活用して参ります。

当会では現在、ヤングケアラー対策検討プロジェクトを立ち上げて、ヤングケアラーと思われる奨学生への面談を進めており、その結果に配慮しつつ早期に適切な支援を行うべく検討しています。